

# 社会的公正研究について

## — 循環的衡平概念導入の試み —

筑波大学大学院(博)心理学研究科 今野 裕之

筑波大学心理学系 堀 洋道

Research in social justice: Introduction of circulative equity

Hiroyuki Konno and Hiromichi Hori (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305, Japan*)

The purposes of this study were (i) to review social justice research, and (ii) to propose a concept of circulative equity.

In this paper, several domains of social justice research were reviewed. In early studies, equity theory (Adams, 1963) is the main approach to studying social justice. However, equity theory has declined in popularity because of severe criticism. As a result, three other approaches have become mainstream in social justice research. There are studies of (i) determinants of reward allocation; (ii) psychological value in social justice; (iii) procedural justice.

In this paper, we expanded Adams' equity theory from the viewpoint of long-term interaction. This expanded version of equity is called circulative equity. The utility of circulative equity and possible future directions are discussed in this paper too.

**Key words:** social justice, equity theory, circulative equity.

古代ギリシアの哲学者 Aristotle 以来、「公正 (justice) とは何か」という問題は、様々な観点から哲学者・社会学者によって論じられてきた。特に法哲学においては、社会的公正の問題は最も主要な研究領域となってきた。法哲学では、公正についての議論を、ある行為や制度が正しいかどうかについて論じる〈規範的公正論〉、公正判断の際の客観的基準が果たして存在するかどうかを論じる〈メタ公正論〉に分類している(碧海, 1985)。

本論文で概観する社会心理学における社会的公正研究は、どのような状態が公正であるのか、という規範的公正論についての客観的なデータを提供することを主な目的としてきたといえるだろう。

心理学で最初に定式化された公正規範は、Adams (1963)の衡平(equity)の規範であった。そこで本論文の第1節では、衡平理論に関する研究を概観する。

後に衡平理論は批判され、社会心理学の公正研究は、様々な方向へと展開していった。第2・第3節は、衡平理論の批判とその後の展開について紹介する。

第4節では、従来の公正研究の問題点を指摘し、あらたな衡平概念として「循環的衡平」を提案する。

### 1. 衡平(equity)としての公正

#### 1.1 衡平理論の哲学・社会学的背景

現存する文献のうち、分配の公正(distributive justice)について論じられている最も古いものは Aristotle の『ニコマコス倫理学』であると言われている(Cohen & Greengerg, 1982; 桂木, 1985; 田中, 1991)。桂木(1985)によれば、Aristotle の公正概念は均等的すなわち〈価値に相応の〉ということであ

り、不公正は不均等的すなわち〈過多をむさぼる〉ことであるという。そして、公正は分配の公正と矯正的公正(rectificatory justice)とに分けられ、前者は共同の事物をその人物の価値に応じて配分するということであり、後者は不公正が生じた際に不当に得をした人物は損や罰を受けねばならないということである。この〈各人に彼のものを〉という Aristotle の公正概念は、Adams (1963) の衡平理論とかなり近いものと指摘されている(田中, 1991)。

その後、政治哲学の Hobbes、功利主義哲学の J.S. Mill や Spencer など、多くの人物が社会的公正を論じたが、社会心理学における公正研究に最も強い影響を与えたのは社会学者 Homans (1961) の社会的交換の理論(social exchange theory)であった。

Homans の理論のうち、分配の公正に関する説明は以下のように要約できる。

人は、社会的相互作用の中で貨幣や労働力、好意や評価といった社会的財貨を交換する。そのような社会的交換の中で、人はなした貢献と受け取る報酬との比率が、交換に参加した人々の間で等しいことを期待する。そして、結果がその期待に反するものであったとき、人は不公正を感じる。不公正に陥ると、人は特有の感情を覚える。たとえば、自分が不当に損をした場合、すなわち貢献に比して報酬が少なすぎる場合に人は怒りを覚え、逆に不当に得をした場合、すなわち貢献に比して報酬が多すぎる場合、人は罪悪感を覚える。不公正であるか否かを判断する際に、人は何らかの重要な点で自分と類似している他者と自分を比較する。

社会的交換理論は、Homans 自身が人間の相互作用に適用された行動心理学によって構成されている(Homans, 1961)と述べていることからわかるように、心理学の知見をもとに構成されたものであった。当然、分配の公正についても、感情反応を取り入れるなど心理学的な色彩を帯びていた。さらに、経済学的交換などそれまでの交換理論では物財や貨幣の交換に焦点を当てていたのに対し、Homans の交換理論では愛情や評価、権力や服従など関係財・行為財の交換までもが取り扱われていた。そのため、この理論は、それまで公正の問題に比較的無関心であった社会心理学者を非常に刺激することとなった。

## 1.2 衡平理論(equity theory)

Homans の理論を受け、分配の公正の問題を本格的に心理学の問題として取り上げたのは Adams (1963) であった。彼女は A と B の二者が参加した報酬分配場面で、分配が公正に行われた状態を衡平(equity)と呼んだ。彼女の衡平理論は、よく知られ

た次の公式によって特徴づけられる。

$$\frac{O_A}{I_A} = \frac{O_B}{I_B} \text{ なら衡平} \dots\dots\dots (1)$$

$$\frac{O_A}{I_A} > \frac{O_B}{I_B} \text{ ならば、Aにとって過大支払いであり不衡平} \dots (2)$$

$$\frac{O_A}{I_A} < \frac{O_B}{I_B} \text{ ならば、Aにとって過小支払いであり不衡平} \dots (3)$$

上の式において、 $I_A$ 、 $I_B$  は参加者 A または B の投入(input)、 $O_A$ 、 $O_B$  は参加者 A または B の結果(outcome)をあらわしている。この式は、Homans の「人はなした貢献と受け取る報酬との比率が、交換に参加した人々の間で等しいことを期待する」という考え方と本質的に等しい。Adams の工夫は、Festinger (1957) の認知的不協和理論を援用し、不衡平(inequity)状況に置かれた人が次にどのような行動をとるかを予測したところにある。Adams によれば、不衡平状況におかれると人は不協和を感じ、何らかの方策による不協和の解消を試みる。したがって、(2)の過大支払いの場合であれば、A は投入を増大させるか結果を減少させる、あるいは自分の報酬が過大である何らかの理由を見つけようとする。(3)の過小支払い状態では、A は投入を減少させるか結果を増大させる、あるいは過小支払いの理由を見いだそうとすることになる。

この理論を検証するため、類似した実験手続きで多くの実験が行われた。これらの実験では、被験者は校正などの単純作業を課せられる。その際、被験者は報酬が労働時間(時間給)もしくは生産量(出来高給)に応じて支払われることを知らされている。実験操作は、十分な職務資格があるかどうかを被験者に知らせる(投入の操作)、被験者に与える給与の量を調節する(結果の操作)というものであった。例えば、過大支払い条件の被験者は「あなたはこの仕事で正当な給与を受けるだけの資格を持っていないが、今回は皆と同じ給与を与える」と告げられるか、あるいは同じだけ働いても他の人よりも多い給与を受け取ることになる。

その後、Adams の理論を検証しようとする実験が多数行われた。その多くが理論を支持する結果となっている(Adams, 1963; Adams & Rosenbaum, 1962; Goodman & Friedman, 1968; Lawler, 1968 など)が、古川(1980)や諸井(1985)のように他の理論による説明が可能であるという問題点を指摘する研究者もいる。

## 1.3 衡平理論の対人関係への拡張

報酬分配に限定されていた衡平理論を拡張し、対

人関係に応用したのがWalster (Hatfield)とその共同研究者達であった(Walster, Berscheid & Walster, 1973; Walster, Walster & Berscheid, 1978; Walster, Walster & Traupmann, 1978). 彼女の衡平理論は次に述べる4つの命題からなっている(Hatfield, Utne & Traupmann, 1979).

**命題1**：人は、自分の結果を最大化しようと試みるであろう(結果とは報賞から罰を差し引いたものである)。

**命題2 A**：集団(その個人を含んでいる集団)は、成員間に資源を衡平に分配するシステムを發展させることによって、集団全体の利益を最大化しうる。

**命題2 B**：一般に、集団は他者を衡平に扱う成員に報酬を与え、他者を不衡平に取り扱う成員を罰するであろう。

**命題3**：人は、自分が不衡平な関係に参加していることを知ると、苦悩を感じるであろう。そして、その苦悩は関係が不衡平であるほど大きくなるであろう。

**命題4**：不衡平な関係に置かれていることに気づいた人は、衡平を回復することによって自分の苦悩を取り除こうと試みるであろう。そして、存在する不衡平が大きく、感じられる苦悩が大きいほど、彼らはより強く衡平を回復しようと試みるであろう。

そして、衡平状態を次の式で表した。

$$\frac{(O_A - I_A)}{(|I_A|)^{KA}} = \frac{(O_B - I_B)}{(|I_B|)^{KB}}$$

$I_A, I_B$  : AまたはBの投入についての検査者(scrutineer)の知覚。

$O_A, O_B$  : AまたはBの結果についての検査者の知覚。

$KA, KB$  : 分母のべき乗をあらわし、1または-1の値を取る。  
「投入」の符号と「結果-投入」の符号が等しければ+1, 符号が異なっていれば-1の値になる。

Adamsの式と異なっているのは、投入や結果が負の場合(たとえば攻撃したり、されたりなど)でも衡平が成り立つよう工夫したためである。また、Walsterの衡平理論の特徴は、命題3に示されているように分配の衡平のみならず対人関係一般に衡平理論を適用出来るようにしたこと、そして命題4に示されているように衡平性の程度と苦悩の程度が比例すると仮定したことである。

Walsterを中心として、この理論を検証しようとする多くの研究が行われた。特に、現実の2者間対人関係を取り上げ、衡平性の程度と対人関係の満足度との関連を検討した研究では、この理論を支持する結果が得られている(Walster, Walster & Traup-

mann, 1978)。日本では、井上(1985)が恋愛関係にある大学生ペアを対象に調査を行い、不衡平の程度が大きいほど心的緊張の程度が大きくなることを見いだしている。諸井(1989)は対人関係の進展の段階別に衡平理論の当てはまりの良さを検討し、衡平性と関係安定性・感情との関連が、関係進展の段階や性別で異なることを明らかにしている。

ところで、Walsterらの衡平についての式は、Adamsの式を拡張し、より広い社会行動を扱えるようにしたものであった。しかし、衡平性を表す式についての議論はその後も続き、Harris(1976)、Anderson(1976)、窪田(1979)などによって、さらに修正を行った式が提出されている。

## 2. 衡平理論への批判

### 2.1 衡平理論批判についての哲学的背景

アメリカの功利主義では、「適者生存」「生存競争」という言葉が尊重された。このスローガンからわかるように、能力のあるものや貢献をしたものはそれだけの結果を受け取り、逆に能力が無く貢献度も低いものは減びるという考え方は、明らかに衡平を志向していたと言える。

この風潮への反論として、独自の公正論を提出したのがRawls(1958)であった。Rawlsの公正論の特徴は、人々の基本的自由を尊重し、社会的に最も不利な条件にある人々の利益を最大化するためには社会的経済的な不衡平も正当化されるという「格差原理」の主張にある。この説を単純に平等主義と言うことはできないが、説の基本に平等志向があるとは言えそうである。この説は、(アメリカの)功利主義が信奉する衡平原理以外の社会的公正の存在を指摘したことなる。

また、Rawls(1963)は、上記の公正さが保たれるためには、人々が公正感覚(sense of justice)を持っていることが必要であることを説いている。公正感覚は、発達段階とともに「権威の罪」「協同の罪」「原理の罪」の3種類の罪悪感を獲得することで養われる。「権威の罪」は、権威者に背く際に感じる罪悪感であり、「協同の罪」は、仲間を裏切る際に感じる罪悪感であり、それぞれ、母子関係上の信頼、仲間関係上の信頼に起因する罪悪感である。また、「原理の罪」は他の2つの罪悪感を獲得し、それが継続的に強化されることで獲得されるという。すなわち、社会の公正さを支えるものとして公正感覚というある種の価値観を想定していたのである。

さらにRawlsは、公正な分配を取り決める際の手続きについても考察を行っており(1951)、全員一致

の原則を重視していた。

次項及び次節に述べるように、Rawlsの公正論は衡平理論批判を行ったDeutschや手続きの公正研究を提唱したLeventhalなど多くの公正研究者に影響を与えている。

## 2.2 衡平理論批判

Adams, Walsterと、衡平理論は拡張、体系化され社会心理学の研究に大きな影響を及ぼした。しかし、それを批判する研究者がいなかったわけではない。むしろ、数多くの批判を浴びたと言っているだろう。その中で、後に最も大きな影響を及ぼしたのがDeutsch(1975)による衡平理論批判であろう。

Deutsch(1982)は衡平理論の問題点として、まず次の3点を挙げている。

①投入や結果の内容として加減乗除の可能な心理学的通貨を仮定しているが、それがどのようなものであるか明確な定義がなされていない。②実験の証拠は論証的(demonstrative)なものというよりも例証的(illustrative)なものである。③投入と結果の内容があいまいで、誰の観点からそれを評価するのが不明である。

しかし、Deutschは上のような欠点、すなわち理論構成の不完全さを社会心理学のほとんどの理論にあてはまるものであるとし、むしろ、衡平理論が持つ大きな問題は、衡平理論の偏狭さにあると述べている。彼は、貢献による取り扱い(衡平)、平等であるように(平等)、要求によって(必要度相応)など公正さの基準は多様なはずであり、衡平理論ではこれらが無視されていると指摘したのである(Deutsch, 1975; Deutsch, 1982)。

## 3. 公正研究の展開と問題

### 3.1 分配行動の規定因

Deutschの衡平理論批判以降、分配の公正についての研究は衡平分配だけでなく平等分配や必要度相応分配を扱うようになった。そして、研究の主な観点は、「人はどのようなときに衡平分配を行うのか、そしてどのようなときに平等分配あるいは必要度相応分配を行うのか」に移行したと言える。すなわち、分配者が分配規範の採択を規定する要因を探る研究(分配規定因研究)へと移行したのである。中でも、研究者が強く惹きつけられたのは、衡平規範と平等規範のいずれの公正規範を採択するかということであった。

Table 1に、これまでの研究で示されてきた衡平分配/平等分配の規定因を示した。これを見ると、

多種多様な要因が衡平-平等分配の規定因として示されてきたことがわかる。田中(1991)はこれらの規定因を、1)性やパーソナリティなどの個人内要因、2)被分配者間の関係性などの対人要因、3)集団の性質や分配方法などの状況要因、4)国籍などの社会・文化的要因に分けている。

ところで筆者らは、本来これらの研究は、社会的公正の本質を明らかにするという目標に向かって収束してゆくべきであると考ええる。具体的には、多様な規定因の背後には、分配規範の採択を規定する何らかの共通要因が潜んでおり、それを明らかにすることで社会的公正についての心理学的解明が可能になると考えるのである。

Shapiro(1975)による自己呈示への関心(self-presentation concerns)による説明は、そのような試みの一つである。この説明によれば、自分も被分配者の一人である分配者が、自分にとって損となる分配規範(高貢献者が分配する場合には平等、低貢献者が分配する場合には衡平)を採択しやすいのは、自分を良く見せようとする自己呈示への関心が高まった場合であるという。この説明を支持する結果はいくつかある。たとえば、分配者が被分配者との将来の相互作用を予期している場合(Shapiro, 1975; 松崎ら, 1980)、自己意識が高まっている場合(Greenberg, 1980)に自分に損な分配をすることが示されている。さらに、自己呈示への関心の個人差も考慮すれば、性差(女性のほうが自分に損となる分配をしやすい; Leventhal & Lane, 1970)なども説明できるかもしれない(奥田, 1984)。

しかし、自己呈示への関心による説明は万能ではない。たとえば、古川(1980)は、集団の管理者に「集団の業績が向上するように(業績向上条件)」あるいは「集団のチームワークが向上するように(チームワーク向上条件)」報酬を分配するよう教示を与えたところ、業績向上条件では衡平分配、チームワーク向上条件では平等分配が行われることを実験的に明らかにしている。この実験では、被験者は被分配者ではなく、「自分が損をする」分配は行いようがない。したがって、自己呈示への関心による説明も不可能である。

さらに、自己呈示への関心による説明は、「自己呈示に関心を払うあまり、真に公正と考える規範を採択せず、良い印象が残る規範を採択する」という説明であり、社会的公正の本質とは関連しない報酬分配のバイアス源として位置づけられるものであろう。

とはいえ、自己呈示への関心による説明に代わる有力な説明原理の提案は行われていない。したがって

Table 1 分配行動の規定因の例

規定因	研究知見
個人内要因	<ul style="list-style-type: none"> <li>・男性及び低貢献の女性では衡平分配，高貢献の女性では平等分配(Levntthal &amp; Lane, 1970).</li> <li>・公的自己意識の高い低貢献者は平等分配(Greenberg, 1983).</li> </ul>
対人要因	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他人同士の分配では衡平分配，友人同士では平等分配(Austin, 1981)</li> <li>・将来，被分配者との相互作用が予期される場合は平等分配，予期されない場合は衡平分配(Shapiro, 1975；松崎ら，1980)</li> <li>・高貢献者が同性と分配する場合には衡平分配，異性と分配する場合には平等分配(Reis &amp; Jackson, 1981)</li> </ul>
状況要因	<ul style="list-style-type: none"> <li>・分配結果が秘密の場合には衡平分配，公開の場合には平等分配(Leventhal et al., 1972)</li> <li>・高貢献者は平等分配，低貢献者は衡平分配(Mikula, 1974；広瀬，1974)</li> <li>・集団目標が業績向上の場合には衡平分配，チームワーク向上の場合には平等分配(古川，1980)</li> <li>・固定集団の低貢献者及び流動集団の高貢献者では衡平分配，固定集団の高貢献者及び流動集団の低貢献者では平等分配(狩野，1980b)</li> <li>・能力によって差のつく課題では衡平分配，運によって差のつ課題では衡平分配(Greenberg, 1980)</li> <li>・ビジネス場面では衡平分配，家庭場面では平等分配(Wagstaff et al., 1993)</li> <li>・集団内の資源量が少ない場合には衡平分配，多い場合には平等分配(齊藤・佐々木，1987)</li> </ul>
社会・文化的要因	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アメリカでは衡平分配，日本では平等分配(狩野，1980a)</li> </ul>

て、今後も分配規範の採択についての統一的な説明原理を提出することが、社会的公正研究者の重要なテーマとなるであろう。

### 3.2 社会的公正観

2.1項で述べたように、Rawls(1963)は、社会全体の公正さが保たれるための要件として公正感覚というある種の価値観の存在を挙げている。

社会心理学の領域で公正さに関する価値観を取り上げたのはLerner(1965)であった。彼は人々の持つ正当世界信念(belief in a just world)、すなわち「この世界は正当であり、名声や報賞あるいは罰はそれを受けるに値する人が受けているのだ」という信念に注目した。正当世界信念は、justという一般的な用語が用いられているものの、その内容から考えて、人々が世界を「衡平」と見なす信念を扱っていると言えよう。

正当世界信念は当初、原因帰属のバイアス源として研究されていた。しかし、Rubin & Peplau(1973)によって正当世界尺度(Just World Scale)が開発さ

れて以降、他の個人差変数との関連や文化比較など数多くの調査研究が行われるようになった。Table 2に正当世界尺度の項目例を示した。

これまで正当世界尺度と正の相関が見いだされた個人差変数は、対人信頼感(Kaplan, 1973)、権威主義(Rubin & Peplau, 1973)、内的帰属(Zuckerman & Gerbasi, 1977)、宗教性(Zweigenhaft et al., 1985)な

Table 2 正当世界尺度の項目例

- |  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・一般に地位や財産を持っている人はそれに値する人間である。</li> <li>・多くの人々が自分自身が犯したのではない過ちで苦しんでいる。(逆転項目)</li> <li>・名声を受けるに値する人はほとんどいない。(逆転項目)</li> <li>・良い行いはしばしば気づかれないし、報われない。(逆転項目)</li> <li>・不運な目にあう人々はその原因を自分自身で作っていることが多い。</li> <li>・基本的にこの世の中は正当な場所である。</li> </ul> |
|--|

どである。また、文化比較では、日本よりアメリカで(Mahler, Greenberg & Hayashi, 1981), イギリスの白人児童より南アフリカの白人児童で(Furnham, 1985)で正当世界尺度の得点が高いことが示されている。さらに、Furnham(1993)は12カ国で正当世界尺度を実施し、社会全体の勢力のばらつき(power-distance)が大きいかほど、正当世界信念(正当世界尺度の正項目の合計), 不当世界信念(同じく逆転項目の合計)とも高くなることを見いだしている。

このような結果は、他の社会的公正研究にも重要な示唆を与えるものである。たとえば、Table 1にも示した狩野(1980a)の研究では、日本で平等分配、アメリカで衡平分配されやすいことが示されているが、これは日本よりもアメリカで正当世界信念が高いことを反映するものとも解釈できる。すなわち、狩野の結果は、正当世界信念の高いアメリカでは、貢献度の高い者が高い結果を得るのが当然と見なされることを示しているのかもしれない。

しかし、社会的公正に関する価値観と実際の分配行動の関連を検討した論文は少なく(斉藤・佐々木, 1987; 斉藤, 1988など), さらに研究の余地があるといえるだろう。

### 3.3 手続き上の公正

近年、社会的公正に関する研究の中で最も盛んなのが、手続き的公正(procedural justice)に関する研究である(田中, 1991)。

2.1項に述べたように、法哲学者Rawlsは1971年にすでに手続き上の公正が重要であることを述べていた。社会心理学でその重要性を最初に指摘したのは、Leventhal(1980)であった。彼は、衡平理論が報酬分配の「結果」に重みを置き過ぎており、分配手続きを無視していると述べ、手続き上の公正研究の重要性を指摘した。すなわち、人々が分配結果に納得するのは、結果の公正さばかりではなく、結果の決定手続きの公正さも影響するという主張である。

Thibaut & Walker(1978)は、公正の決定手続きとして、以下の5つを区別している。それは、1)専制 (autocratic), 2) 仲裁 (arbitration), 3) 調停 (mediation), 4) 議論 (moot), 5) 交渉 (bargaining)である。これらは、意志決定過程を当事者がどれだけコントロールできるかという点で異なっている。後に挙げたものほど、当事者が決定プロセスを制御可能な決定手続きである。たとえば、「専制」は第3者によって決定され、当事者は決定プロセスを制御することができない。一方、「交渉」では当事者同

士の交渉によって決定される。

これまでの研究で、人はより公正と知覚される決定手続きを好むこと、そして、公正と知覚される程度は決定プロセスを制御できる程度と関連が強いことが示されている(Lind & Tyler, 1988)。

手続き上の公正研究は、公正さの源をその決定手続きに求めた研究といえる。とはいえ、当然ながら、公正さの源は決定手続きのみにあるのではない。これまで概観してきたように、いかなる公正規範が採択されるかということも重要である。

しかし、近年の手続き上の公正研究では、手続きに焦点を当てるあまり、結果がどのように分配されるかということとはほとんど考慮されていない。このような研究志向の不自然さは、現実には、手続きのみで公正が語られることがあり得ないことを考えれば明らかである。たとえば、査定の方がいくら公正であっても給与の額を無視することはできないし、裁判手続きが公正に行われているとしても勝敗を無視できるわけではないのである。

したがって、今後は分配規範と手続きとの相互作用に注目した研究が必要となると思われる。

## 4. 循環的衡平(circulative equity)概念の提案

### 4.1 社会的公正研究の問題点

本論文の冒頭で述べたように、社会心理学における公正研究は、どのような状態が公正であるのか、という規範的公正論についての客観的なデータを提供することを主な目的としてきたといえる。すなわち、その目指すところは社会的公正に関する規範的モデルの提出にある。

AdamsやWalsterらの衡平理論は、明らかに、そのような規範的モデルを志向していた。しかし、すでに述べたように、衡平理論にはいくつかの問題点があった(2.2項)。そして、最大の問題とされたのは、衡平理論が社会的公正の一部のみを扱っているということであった。

その批判を直接に反映して行われたのが、報酬分配行動の規定因を探る研究であった。しかし、Table 1に示したように、研究は分配行動の規定因を一つ一つ明らかにするにとどまっていた。その後、研究の「流行」は手続き上の公正へと移り、規範的モデルが提出されないまま分配規定因研究は終焉をむかえたかのように見える。

衡平理論から分配規定因研究への研究テーマの推移は、より多くの分配規範を扱うようになったという点では、研究の発展を促したのかもしれない。しかし、多くの実証データから社会的公正の規範的モ

デルを提出してこそ、本質的な研究の発展がなされるのではないだろうか。

そこで、本論文の最終節では、分配規定因研究の知見をもとに、衡平理論を拡張し、社会的公正に関する新たな規範的モデルの提出を試みる。

#### 4.2 衡平理論の時間的拡張

すでに述べたように、分配規定因についてのこれまでの知見は、1)個人内要因、2)対人要因、3)状況要因、3)社会・文化的要因に区分できる(田中, 1991)。

個人内要因については、性差(Leventhal & Lane, 1970)、自己意識による差(Greenberg, 1980)などが示されている。しかし、本論文で提出する規範的モデルでは個人差は扱わないので、ここでの言及は行わない。

対人要因については、友人との分配(Austin, 1981)や、将来の相互作用が予期される場合(Shapiro, 1975; 松崎ら, 1980)に平等分配が行われやすいことが示されている。これらに共通するのは、相互作用の長期性が意識されているということであろう。

相互作用が長期にわたることが意識されると、なぜ平等分配されやすいのであろうか。Shapiro (1975)は、貢献度の高い分配者は、平等分配することで被分配者から正の評価を受け、その結果円滑な対人関係を生み出そうとする、という自己呈示への動機付けによる解釈を行っている。そして、自己呈示への動機付けは将来にわたって相互作用が予期される場合に高くなるという。この解釈では、衡平分配が公正な分配であるという暗黙の仮定がある。つまり、分配者は不公正な平等分配をあえて採用することで、被分配者からの高い評価を得ようとするのである。

しかし、これとは別の解釈も可能である。

Adams (1963)の主張に従い、衡平状態が最も心理的不協和が少ない状況であると仮定してみよう。この仮定に従えば、人は衡平状態を求めることになる。ただし、相互作用が長期にわたることが意識される状況では、一度の報酬分配で衡平を達成する必要はない。なぜなら、対人関係においては、互惠性(reciprocity)の規範が強く働いており、一方が不当に損をしたとしても、返報行為によって損はいずれ解消されると期待できるからである。むしろ、相互作用が長期にわたるにも関わらず、一度の報酬分配ごとに衡平を達成しようと試みるなら、2者間あるいは集団成員間の競争が促進され、その結果、対人関係の悪化や集団の生産性の低下が生じるかもしれない(Deutsch, 1949)。そのため、長期的な相互作用

が予期できる場合、人は衡平性をあらわにする事を好まず、平等分配をこそ好むのである。

状況要因については、業績向上—チームワーク向上目標が与えられた場合(古川, 1983)、流動—固定集団(狩野, 1980b)、ビジネス—家庭場面(Wagstaff et al., 1993)など、集団の性質をあつかった研究が多く行われている。これらの研究知見についても、衡平理論を時間的に拡張することで解釈可能である。これらの研究では、チームワーク向上目標・固定集団・家庭場面で平等が志向されている(狩野, 1980b)では、分配者も被分配者のため、固定集団のうち高貢献者が平等分配を行いやすい。これらの集団・場面は、いずれも相互作用の長期性と対人関係の相対的に親密さによって特徴づけられる。相互作用が長期にわたる場合には、一度の分配で衡平性を達成する必要はなく、むしろ対人関係の円滑さへのメリットなどから、平等性が好まれるのである。

「相互作用が長期にわたる場合、短期的には平等分配がなされ、長期的に衡平が達成される。」これが、本論文で筆者らが主張したい事柄である。既に述べたように、短期的に衡平を追求することは、対人関係の観点からみれば、デメリットが大きい。そのため、短期的には平等分配が行われる。しかし、長期的にも平等であることが公正だとは考えにくい。Aristotle以来、数多くの哲学者・心理学者が主張してきたように、衡平が最も基本的な社会的公正であることは確かであろう。したがって、人々は短期的には平等であっても、長期的には衡平であることを望んでいると考えられる。つまり、人々は「心理社会的財貨が一時的に不衡平に分配されようとも、心理社会的財貨は人々の間を絶えず循環しており、貢献はいずれ報われ、衡平性が達成される」という感覚を持っているのではないだろうか。

アメリカでは衡平分配、日本では平等分配されやすい(狩野, 1980a)というような社会・文化的差異は、上記のような感覚が、日本でより強く意識されている結果を反映したものかもしれない。

#### 4.3 循環的衡平

前項で論じたように、長期的な相互作用が行われる場合、社会的・心理的財貨は集団の中を循環し、最終的に衡平が達成されると考えられる。本論文では、このような衡平性を「循環的衡平」と名付けることにする。

循環的衡平は以下のように要約できる。

- 1) 人は自己の利益を最大化しようと試みる。しかし、集団あるいは社会の制裁機構が働くため、やみくもに利己的な行動をとることはできない。利

己的行為者は制裁を受けるからである。そこで、集団内の妥協点として衡平分配が採択される。

- 2) 集団内で報酬分配が何度も行われる場合、1度の報酬分配で衡平な分配を達成する必要はい。長期的に見て衡平分配が達成されればよいからである。逆に、報酬分配が一度しか行われな場合、人はその一度で衡平分配を達成しようとする。
- 3) 長期的な報酬分配が予測される場合、人は衡平分配ではなくむしろ平等分配を志向する。短期的な平等性は、集団内の競争の激化を抑制し、協同的集団の形成に貢献するからである。
- 4) 長期的な報酬分配が予測される場合、最終的には衡平性が回復される。衡平性の回復は、(1)過大利得・過小利得が成員内で循環する形で、あるいは、(2)過大利得や過小利得が特定の成員に偏った場合には、過小利得者に社会的勢力を与えることで行われる。

#### 4.4 今後の展望

前項まで、衡平理論を拡張し、循環的衡平の概念を提案した。この概念は、分配規定因研究の知見をもとにしたものとはいえ、その実在性・有効性を実証するデータは無い。

しかし、あえてその有用性を主張するならば、次の2点に要約できる。

第1に、広範囲な分配の公正を説明できること。

第2に、従来の衡平理論に比べ、現実の分配場面に近いものを扱っていること。

第1の点については、4.2項ですでに述べた。これまで平等規範が支配的と考えられてきたいくつかの状況は、長期的な視点からみれば衡平が成立していると解釈できた。このように理論の適用範囲が広がることは、社会現象のより一貫した説明を促し、ひいては、社会現象の一層の理解に貢献するものと考えられる。

第2点については、企業の給与分配など現実の報酬分配場面で、分配機会がただ一度限りということがあり得ないことから明らかであろう。むしろ、従来の衡平理論及び分配規定因研究が、あまりに不自然な分配場面を扱っていたのである。

このような有用性は考えられるものの、循環的衡平概念は実証データに裏付けられておらず、現時点では今後の研究の「たたき台」という位置づけが適当である。

今後は、実証データを重ねるとともに、理論のさらなる精緻化がもめられる。その際、社会的公正観など他の公正研究と関連づけて研究してゆくことが必要となるであろう。

## 要約

本論文の目的は、(1)これまでの社会的公正研究の展望を行うこと、そして(2)循環的衡平概念の導入を行うことであった。

本論文では、社会的公正研究のいくつかの領域について展望を行った。初期の社会的公正研究においては、衡平理論(equity theory; Adams, 1963)を中心に研究が行われた。しかし、衡平理論に関する研究は、後に多くの批判を浴び、衰退し、その後、(1)分配規定因についての研究、(2)社会的公正観についての研究、(3)手続き上の公正についての研究が主流となった。

さらに筆者らは、Adamsの衡平理論を、長期的相互作用の観点から拡張した。この拡張された衡平概念は循環的衡平と名付けられた。最後に、循環的衡平概念の有用性と今後の展望についての議論を行った。

## 引用文献

- Adams, J.S. 1963 Toward an understanding of inequity. *Journal of Abnormal & Social Psychology*, **67**, 422-436.
- Adams, J.S., & Rosenbaum, W.B. 1962 The relationship of worker productivity to cognitive dissonance about wage inequities. *Journal of Applied Psychology*, **46**, 161-164.
- 相川 充 1981 報酬分配における個人決定と集団決定について. *心理学研究*, **52**, 113-119.
- Anderson, N.H. 1976 Equity judgments as information intergration. *Journal of Personality & Social Psychology*, **33**, 291-299.
- 碧海純一 1985 法哲学 大百科事典第13巻 平凡社 Pp.882-883.
- Austin, W. 1980 Friendship and fairness. Effects of type of relationship and task performance on choice of distribution rules. *Personality & Social Psychology Bulletin*, **6**, 401-408.
- Cohen, R.L., & Greenberg, J. 1982 The justice concept in social behavior. Academic Press, pp.1-41.
- Deutsch, M. 1975 Equity, equality, and need: What determines which value will be used as the basis of distributive justice? *Journal of Social Issues*, **31**, 137-149.
- Deutsch, M. 1982 公正の社会心理学 三隅・木下編「現代社会心理学の発展 I」所収 ナカニシヤ出版。

- Festinger, L. 1957 A theory of cognitive dissonance. Evanston: Row, Peterson.
- Furnham, A. 1985 Just world beliefs in an unjust society: A cross-cultural comparison. *European Journal of Social Psychology*, **23**, 265-269.
- Furnham, A. 1993 Just world beliefs in twelve societies. *The Journal of Social Psychology*, **133**, 317-329.
- 古川久敬 1980 管理者の給与に対する不公正感に関する心理学的研究. *応用心理学研究*, **3**・**4**, 1-8.
- 古川久敬 1983 管理者行動としての報酬分配. *心理学研究*, **54**, 43-49.
- Goodman, P.S., & Friedman, A. 1968 An examination of the effect of wage inequity in the hourly condition. *Organizational Behavior and Human Performance*, **3**, 340-352.
- Greenberg, J. 1980 Attentional focus and locus of performance causality as determinants of equity behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **38**, 579-588.
- Greenberg, M.S. & Willis, H. (Eds.) Social exchange: Advances in theory and research. New York: Wiley, Pp.27-55.
- Harris, R.J. 1976 Handling negative inputs: On the plausible equity formulae. *Journal of Experimental Social Psychology*, **12**, 194-209.
- Hatfield, E., Utne, M.K. & Traupmann, J. 1979 Equity theory and intimate relationships. In Burgess, R. L., & Huston, T.L. (Eds.) Social exchange in developing relationships. Academic Press. Pp.99-133.
- Homans, G.C. 1961 Social behavior: Its elementary forms. New York: Harcourt Brace & World.
- 井上和子 1985 恋愛関係における Equity 理論の検証. *実験社会心理学研究*, **24**, 127-134.
- 狩野素朗 1980a Distributive Justiceにおける日本人の平等主義と他者志向性. *日本心理学会第44回大会発表文集*, 7.
- 狩野素朗 1980b 集団内の分配の構成に関する日米比較. *日本心理学会第44回大会発表文集*, 756.
- Kaplan, R. 1973 Components of trust: Note on the use of Rotter's scale. *Psychological Reports*, **33**, 13-14.
- 桂木隆夫 1985 正義 大百科事典第8巻 平凡社 Pp.264-265.
- 窪田由紀 1979 Equity 理論に関する一考察—特に数量化の問題を中心に—. *実験社会心理学研究*, **23**, 125-137.
- Lawler, E.E. 1968 Effects of hourly overpayments on productivity and work quality. *Journal of Personality and Social Psychology*, **10**, 306-313.
- Lerner, M. 1965 Evaluation of performance as a function of performer's reward and attractiveness. *Journal of Personality and Social Psychology*, **1**, 355-360.
- Leventhal, G.S. 1980 What should be done with equity theory? New approaches to the study of fairness in social relationships. In K.J. Gergen, M.S. Greenberg, & H. Willis (Eds.) Social exchange: Advances in theory and research. New York: Wiley, Pp. 27-55.
- Leventhal, G.S., & Lane, D.W. 1970 Sex, age, and equity behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **15**, 312-316.
- Leventhal, G.S., Michaels, J.W., & Sanford, C. 1972 Inequity and interpersonal conflict: Reward allocation and secrecy about reward as methods of preventing conflict. *Journal of Personality & Social Psychology*, **23**, 88-102.
- Lind, E.A., & Tyler, T.R. 1988 The social psychology of procedural justice. New York: Plenum press.
- Mahler, I., Greenberg, L., & Hayashi, H. 1981 A comparative study of rules of justice: Japanese versus American. *Psychologica*, **24**, 1-8.
- 松崎 学・相川 充・上野徳美 1980 報酬分配における将来の相互作用への期待の効果—分配者の存在との関連において—. *心理学研究*, **51**, 120-127.
- Mikula, G. 1974 Nationality, performance, and sex as determinants of reward allocation. *Journal of Personality and Social psychology*, **29**, 435-440.
- 諸井克英 1985 衡平理論における“不衡平な給与—課題遂行”パラダイムの検討. *実験社会心理学研究*, **24**, 175-184.
- 諸井克英 1989 対人関係への衡平理論の適用(2)—同性親友との関係における衡平性と情動的状态—. *実験社会心理学*, **28**, 131-141.
- 奥田秀宇 1984 報酬分配意見が対人魅力に及ぼす効果. *心理学研究*, **55**, 22-28.
- Rawls, J. 1951 Outline of a Decision Procedure for Ethics. (倫理上の決定手続きの概要 1979 守屋明訳 公正としての正義 田中成明編訳 木鐸社)
- Rawls, J. 1958 Justice as Fairness. (公正としての正義 1979 田中成明訳 公正としての正義 田中

- 成明編訳 木鐸社)
- Rawls, J. 1963 The Sence of Justice. (正義感覚  
1979 岩倉正博訳 公正としての正義 田中成明  
編訳 木鐸社)
- Reis, H.T., & Gruzen, J. 1976 On mediating equity,  
equality, and self-interest: The role of self pre-  
sentation in social exchange. *Journal of Ex-  
perimental Social Psychology*, **12**, 487-503.
- Reis, H.T., & Jackson, L.A. 1981 Sex differences in  
reward allocation: Subjects, partners, and tasks.  
*Journal of Personality & Social Psychology*, **40**,  
465-478.
- Rubin, Z., & Peplau, L. 1973 Belief in a just world  
and reactions to another's lot: A study of partici-  
pants in the national draft lottery. *Journal of Social  
Issues*, **31**, 65-90.
- 齊藤友里子 1988 公正原理採択の規定因としての  
状況特性(Ⅱ). *実験社会心理学*, **27**, 131-138.
- 齊藤友里子・佐々木薫 1987 公正原理採択の規定  
因としての状況特性. *実験社会心理学*, **27**,  
79-87.
- Shapiro, E.E. 1975 Effect of expectations of future  
interaction on reward allocations in dyads: Equity  
or equality. *Journal of Personality & Social Psycholo-  
gy*, **31**, 873-880.
- 田中堅一郎 1991 報酬分配に関する研究動向 —  
衡平理論(equity theory)の発展と衰退を中心とし  
て— *心理学評論*, **34**, 500-523.
- Thibaut, J. & Walker, L. 1978 A theory of procedure.  
*California Law Review*, **66**, 541-566.
- Walster, E., Bersheid, E., & Walster, G.W. 1973 New  
directions in equity research. *Journal of Personality  
& Social Psychology*, **25**, 151-176.
- Walster, E., Walster, G.W., & Berscheid, W. 1978  
Equity: Theory and research. Allyn & Bacon.
- Walster, E. Walste, G.W., & Traupmann, E. 1978  
Equity and premarital sex. *Journal of Personality  
and Social Psychology*, **36**, 82-92.
- Zuckerman, M., & Gerbasi, K. 1977 Belief in internal  
control or belief in a just world. *Journal of Perso-  
nality*, **45**, 356-378.
- Zweigenhaft, R., Phillips, B., Adams, K., Morse, C., &  
Horan, A. 1985 Religious preference and belief in  
a just world. *Social and General Psychology Mono-  
graphs*, **3**, 333-348.